

# 妖怪が伝える、命をつなぐ術と記憶

編集部

## 水辺・自然への意識と妖怪

「妖怪」をテーマに選んだのは「怖い」から「かわいい」存在となった妖怪の変遷をたどることで、人の自然観などの変化を探りたかったからだ。ところが取材を始めると「そうだったのか！」と驚くことばかり。編集部の予想をはるかに超えて、妖怪は私たちの生活や文化に深く根ざしていた。

と、妖怪は私たちの暮らしのなかで今も生きつづけている存在であり、また今だからこそ必要とされる理由があることも、徐々に明らかになっていった。

## 妖怪伝説の光と陰

かの宮本常一や山本周五郎が監修した『日本残酷物語』（平凡社）という書籍がある。日本の昔の民の暮らしがいかに辛く厳しかったかを綴った本だが、似た話は今も生きている。

例えば「天狗にさらわれた」という話。昔むかし、大きな杉の梢にちよんまげと着物の一部が引っかかっていた。修行僧が天狗にさらわれたのだと伝えられているが、実はよそから来て乱暴狼藉をはたらいた不届き者を村人たちがこっそり始末したもの。「あの家の者がやったらしい」という話まで残っていると

……のは事実ではなく、その姿に驚いた親が焼き殺して埋めたそう。これに類似した「鬼子殺し」の話は全国にある。そして「神隠し」のある種の真実。村人が行きずりの異性と恋に落ちて夜逃げしても、皆が「神隠しだね」と知らないふりをすれば、残された夫もしくは妻は再婚しやすい。人手を確保し、共同体を維持する知恵だ。

現代からすれば、いずれも「とんでもない話」だが、侵入者から身を守る自衛手段であり、「生きていても苦勞するから」という苦しい親心であり、「氣を落とさずに再出発しなさいよ」という親切心でもある。

危険な場所や忘れてはならない事実を、日本では妖怪話として口承してきた。しかも、決して昔話ではない。徳島の山城町に「青石の青坊主」が棲むと伝わる場所がある。昔から水害や溺死が相次ぎ、旧国道で狭かったころは車の転落事故も多かったが、道路が拡幅した今でも車の事故はなくなり。それどころか「ガードレールに傷一つつけず」に宙を飛ばす不思議なことが起きている。「同じところで事故しよんなあ。不思議やな」（妖怪村・平田政廣さん）。妖怪は古びた伝承ではないのだ。

そもそも妖怪は、たびたび起こる不思議な現象に、人が安心してするために姿形を与えたものだった。だから、文明が発展するなかで自然への畏怖が薄らぐと、妖怪の意味合いも変わっていく。人が水辺・自然を技術的にある程度コントロールできるようなになると、例えば河童が親しみを感ぜさせる存在となったように、妖怪全般が人に楽しみを提供する大衆文化となっていく。

「鬼子」という伝承もある。生まれたときから歯が生えていて、すぐに歩き出し、ごはんも食べないで、じきに裏山へ消えていった

暗い話だが、いずれも取材で聞いたことである。さほど昔の出来事ではないこれらの話から透けて見えるのは生き抜くための「知恵」と他者への「寛容」の心。特に「知恵」を後世につなげてきたのが、妖怪を軸としたさまざまな口頭伝承だった。

今、子どもたちの間で、物事がうまくいかないと妖怪のせいにする風潮があるそう。教育的にどうなの？と心配する向きもあるが、子どもには逃げ場が必要かもしれない。それは大人も同じこと。会社では成果が常に求められ、失敗はできない。コミュニケーション

ンを円滑にする手段であるはずのSNSでも「いいね！しなければ……」など妙に気を遣う。殺伐とした空気が漂うのは、互いに対する寛容さが、私たちに足りないからではないだろうか。日常のささいな失敗をとがめだて、他人を窮地に追い込むのは得策ではない。人と人が支え合わなければこの社会は成り立たないからだ。かつて人々は、妖怪を緩衝材として他人を責めない寛容さをもっていた。

## 今も必要な「生きる術」

生きづらさの解消へ

今、子どもたちの間で、物事がうまくいかないと妖怪のせいにする風潮があるそう。教育的にどうなの？と心配する向きもあるが、子どもには逃げ場が必要かもしれない。それは大人も同じこと。会社では成果が常に求められ、失敗はできない。コミュニケーション

生きづらさの解消へ

今、子どもたちの間で、物事がうまくいかないと妖怪のせいにする風潮があるそう。教育的にどうなの？と心配する向きもあるが、子どもには逃げ場が必要かもしれない。それは大人も同じこと。会社では成果が常に求められ、失敗はできない。コミュニケーション

生きづらさの解消へ

生きづらさの解消へ

生きづらさの解消へ

生きづらさの解消へ

生きづらさの解消へ

生きづらさの解消へ

